

残火の太刀・太陽の子

1056隊風見鶏少尉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

全ての呼吸の祖である『日の呼吸』を受け継いだ竈門家。そしてその呼吸法を受け継ぎ、研鑽し、取り込んだ者がいた。

――その名は『陽^{ひのもと}元家』

――その呼吸は『陽^{ひのもと}元の呼吸』

なお鬼舞辻無惨は引きこもった。

目次

第1話

かつて、鬼の祖を追い詰めた鬼狩がいたように。
鬼狩りの牙は残っていた。

ーかつての始まりの呼吸と同じ毛色の者が。
そのものは柄も鞘も煤で真っ黒に染まっている刀を持ち、太陽の如きものだという。

「ーふん」

欠伸が出るほどのろい攻撃を避けて丈が2メートルは超えるであろう大熊の横腹に拳を当て力を込める。

バキリッ

軽い音を立てて骨が折れる音と熊の断末魔が響く。動けなくなつた熊に黙禱を捧げてから腰に差していた柄も鞘も煤で真っ黒に染まっている刀を抜いた。

刀身はそれに反して不気味なほど白刃を保っていた。

今世に生を授けられて何十年、儂はもう十分すぎるほどに生きた。儂がまだ生きているのは幸運とそうじゃな……復讐といふべきか。儂の伴侶と息子、娘を亡き者とした者へのな。

家内たちを亡くしたショックで数年はふらふらと彷徨つているとある家にたどり着いた。聞けば儂と同じ呼吸の、それも祖にのもししい。儂のはあくまでそれを受け継がず、取り込み改良したもの。祖には及ばぬ、頭を深く下げ詫びを入れしばらく出て行くと言ったがしばらく住まわせてもらうことになった。なんでも父・竈門炭十郎殿は病にふせつており良くない予感がすると、もしものは時は貴方が我が家族を守って欲しいと……

かつて家内を守れなかつた身、同門の、それも我が祖の者の願いをどうして跳ね除けられましたか。この『陽元の呼吸』ただ一人の使い手、陽元源流斎。承った。

――竈門炭十郎殿の予感通り、それは来た。それは炭十郎殿が峠の時に現れた。

「――炭十郎殿、儂は出ます。どうか炭十郎殿は皆様と一緒に。葵枝殿、炭治郎殿、禰豆子殿、竹雄殿、花子殿、茂殿、六太殿、皆さまはここにいてください。決して外には出ず、大きな音がしても儂が戻って来るまでは出てこないで下され。これは父君の――炭十郎殿との約束である」

あとは母君に任せ、儂は刀を取り母屋を出る。少し歩くとソイツはいた。

外見は人だが擬態した鬼といった姿だ。

整った容貌に洋風の服装、青白い顔色をしている。

だが内に秘めるものは、人ではない。しかし竈門家にたどり着くまでにはいた鬼のようでもない。

「――なんだ貴様は」

そう問うてくる人外の言葉を無視し、言葉を紡ぐ。

「……陽元の者たちを知っているか？ 貴様が殺めたのか？」

「……きさまのような老いばれ用はない。あるのは後ろの家の者た

ちだ疾く失せろ」

「――ならばこの刀に見覚えは？」

よく見えるように頭上に掲げる。これまで出会った鬼と呼ばれるものすべてに聞いてきたがどれも違った。このものならばそうなのではと、敵なのではと我が刀、祖と同じように鬼に猛威を奮った証を示す、すると目の前の男は分かりやすいくらいに顔色を変えた。

――お前か。

「――うぬが打ち損じた陽元ひのもとの者だ。名を陽元源流齋、我が家に手を出したこと、後悔しながら死んで逝け」

構える間にヤツは踵を返して逃げ出そうとした。しかし、逃すものか我が怨敵よ。

「――受けよ怨敵、『壹ノ型・刃雪陽光』」

チンツ、と鏢が鳴り、逃げようとしていた鬼――鬼舞辻無惨の四肢を切り離す。

『陽元の呼吸・二ノ型・炎天極楽えんでんごくらく』

四肢が切断され、再生する間に接近し怨敵をさらに切り刻む。『陽元の呼吸・二ノ型・円天極楽』、壹ノ型とは違い、刀を円状に振るった遠心力で切り刻むというものであるが、それだけで無惨の身体は何十分割もされていた。

――細切れか、それこそ灰も焼き尽くさんと死なぬか。

全身を分割してなお再生する目の前の怨敵――鬼舞辻無惨を見て我が陽元の奥義を迷わず使うことを決めた。

「陽元の呼吸・奥義【残火の太刀】――」

瞬間、無惨と源流齋のいた山中の温度が変わった。

(なんだこれは、これはまるで、忌まわしき――)

鬼舞辻無惨は突如として変わった老人と場の温度、雰囲気困惑していた。

これはまるで、

まるで、われらを縛る――

「――『西・残日獄衣』」

――太陽のようではないか。

「陽元の呼吸・奥義【残火の太刀・東・旭日刃】」

ただそこにいるだけで肌を焼き、炭化させるような、それこそ太陽の光を直に浴びた時のような攻撃。

その隙に近づかれ、刀身が斬る瞬間に白熱に達し、四肢と首を切り落とす。

切った首以外は炭化させたが、髪の毛の一部を変化させて首元の炭化が始まった部分を切り落とし、再生を始めた。

「――鳴女えええツツツ!!」

断末魔のように醜い声が響く。煩いぞ、疾く逝ね。

二撃目で頭部を両断しようとした時、襖が鬼の前と後ろ、そして儂の上下左右に展開される。

だか引かぬ。しかし――

一步踏み込み、その領域外から出る。しかしながらその襖から何者かが出てきた。一人は刀を持った剣士。顔には6つの目をもつ異形の者。一人は優男に見受けられる青年だが周囲に冷気を纏わせる異形。一人は奇怪な刺青をした異形、一人は小柄で弱い老人のような異形。一人は壺の中から現れた人とは違う異形……邪魔だどれも。

それぞれが連携なぞ知らぬとばかりに背後から左右から上下から後ろから襲ってきた。怨敵は目の前だというのにまこと邪魔なものよ、それも襖の中に入ろうとしている。このまま怨敵を追うのは恐らくかたんだである。この異形が突然出てきたように同じ襖に入ればいけるだろう。しかし問題はこつちである、今行けば炭十郎殿の約束を犯意にしたのと同義である。ならば――

――お前は儂が殺すぞ、怨敵よ。

「陽元の呼吸・奥義【残火の太刀・南・一刀火葬】」

後ろにある竈門家を守るべくここに残り、【南】を使う。構えた刀を地面に突き刺す。それで終わりじゃ。たとえ、月に似た斬撃を飛ばそ

うとも、氷で作った像や周囲に氷毒を巻こうとも、破壊の一点で向かってこようとも、四人に分身し攻撃してこようとも、巨大な金魚のようなものと手をこちらに迫らせようとも全て些事である。

瞬間、圧倒的な熱量が周囲を蹂躪する。我は〔南〕を纏っていたため無事ではあったがそれで解けてしまった。しかし周囲はそうはいかんだろう、その全てが致命傷であった。一人は身体の八割が炭化しており死を待つばかりであった。だが、この程度で手を緩める儂ではない。

「――陽元の呼吸・奥義〔残火の太刀・東・旭日刃〕」

刹那、自身を囲むようにいた異形を斬り刻む。一人だけ六ツ目をしたものが超反応し片腕だけで済んでいたが、逃さん、『陽元の呼吸・三ノ型・爆陽光刃』――『陽元の呼吸・奥義〔残火の太刀・西・残日獄衣〕』

轟ッ、と辺りを熱波で焼き尽くしながら白刃が六ツ目を捉えた。瞬間、全身を業火で焼かれたの如き痛みとともに吹き飛ばされる。

その技はこの場にいた上限の壱『黒死牟』のみが感知したものであった。

黒死牟もそのほかの三人も鬼舞辻無惨が襖で逃げてからすぐに鳴女が逃走用の襖を用意していたとしても我々が逃げ切れるか分からない。

その圧倒的な姿に黒死牟は――弟の姿を幻視した。

「陽元の呼吸・奥義〔残火の太刀――――――〕」

走馬灯の如き一瞬、認識できたのは数瞬になにかをしたこと、忒は左腕と右手、参は左脚と右腕、肆は胴体を、そして私は左の三つ目を斬られていた。

一度だけ出会ったヤツが儂の怨敵ということ。存外に弱く、臆病なヤツであった、一太刀で身体を灰にしたところで逃げおった。絶対

にいずれ殺す。

途中で邪魔が入った、まさか奥義の北を使わぎると思わなかった。深手は負わせた、治りはせぬ傷も与えた、一人は屠った。しかし、それだけである。

「……衰えたのう」

全盛期には遠い。儂はゆっくりと息を吐いた。

それから刀身を鞘へと戻し、竈門家へ戻る。

「――竈門炭十郎殿、あい戻った。安心なされよ、危機は脱した」
家の中へ入り、家主にそう告げる。しかし帰ってきたのは家内の悲しき声のみ。

儂は反射的に襖を開けると、とてもやすらかな顔をした炭十郎殿が家内たちの涙で濡れていた。

――儂は炭十郎殿を看取れなかったか。

儂は炭十郎殿を看取れなかった。しかし家族は全員生きて看取れた。

炭十郎殿は儂に最期の願いを託した。

――『家族』と『日の呼吸』を。